衆衛生（瀧澤利行），薬学（米田政典）など，多くの医史学関連項目を挙げました．

地域篇では各都道府県別に洋学史研究の現状をまとめ，そこに各県域での医史学研究を絡めて叙述してみました．具体的な内容は，本書を読んでいただければと思います．

『洋学史事典』以後の本書での新たな研究状況を，種痘を例にまとめてみます．『洋学史事典』においては，種痘，天然痘の項目はなく，『種痘必順弁』（339頁，深瀬泰旦執筆），伊東玄朴（59頁，鍵山榮執筆），楢林宗建（531頁，中西啓執筆）のほか，モーニッケ（706頁，長門谷洋治執筆）では，「佐賀藩主・鍋島閑叟は藩医楢林宗建を通じ商館長に痘苗の取り寄せを依頼．モーニッケはこれに応じて持参したが善感せず，痘漿でなく痘痂がよいのではないかとし，それがバタビアより着いたのが四九年七月で，宗建子息の上腕の接種に成功し，これより京都・福井にまで種痘が伝わるに至った」とあります．

じつは，種痘伝来時期は，嘉永2年（1849）6月か7月か研究者の間でも，近年まで定まっていませんでした．それを，アン・ジャネッタ『種痘伝来』（英語版2007，廣川和花・木曾明子翻訳2013）で，モーニッケの書翰や商館長ヨゼフ・ヘンレイ・レフィスゾーンの『オランダ商館日記』から，痘苗の到着が，西暦1849年8月11日（和暦6月23日）で，楢林宗建子らへの接種が8月14日（和暦6月26日）と初めて確定しました．そのことは，青木が柴田方庵日記など日本側史料で検証しました．

しかしながら，アン・ジャネッタ著でも，日本国内への伝播については，『洋学史事典』や，『天然痘ゼロへの道』（内藤記念くすり博物館，1983）に依拠したままだったので，誤りもあり，各地の地域史研究の成果が十分伝わっていませんでした．

こうした問題点をふまえ，『洋学史研究事典』では，各地域の種痘伝播と役割や特徴についても極力調査し掲載しました．平行して，青木歳幸を代表とする科研費チームが『天然痘との闘い』（岩田書院）シリーズで，全国調査をすすめました．

近代医学は，西洋医学を土台にしています．西洋医学がどのようにわが国に導入され，漢方医学や和方医学らと混交・反発し，医学の正統となっていったのか，地域においてどのような医学教育が行われ，独自に展開していったのか，その歴史をさぐることが，これからの医史学研究に大きな意義を有するのではないでしょうか．

山崎佐氏が『日本教育史資料』などから『各藩医学教育の展望』（国土社，1955）を発表してから70年近くたちます．坂井建雄編『医学教育の歴史』（法政大学出版局，2019）が古今と東西の視点から，内外各地の医学教育をまとめ，口火を開きました．

『洋学史研究事典』の地域篇での手法と『明治前医学史』の手法とを用いて，学際的に，藩だけでなく私塾を含めた医学教育の全国的な医史学研究が求められている時期ではないでしょうか．

（令和4年6月例会）

---

書　評

## 服部　瑛著
## 『古文書から見た幕末のコレラ――コロナ禍に遭遇して――』

本書について，「幕末安政時代のコレラの流行の実際について古文書を通して点検，体験していただく試み」を通して，「コロナウイルスが跋扈している今ならば当時の状況を正しく理解していただけるのではないか」と筆者がまえがきで執筆の目的を述べている．本書は現在のコロナ禍にも通じる過去のパンデミックがあり，それを知ることができる郷土資料が残されていることを私たちに

示してくれる，正に時宜にかなった書といえる．

目次を見てみると，

はじめに
第一章　上原元伯『暴瀉病ニ付』
第二章　『安政記聞』のコレラ
第三章　倉野神社と赤城神社のコレラ
第四章　三右衛門日記のコレラ
第五章　各『県史』におけるコレラ
第六章　終章

とあり，『県史』を除いて6件の古文書群から安政のコレラを読み解いている．

近年，地方文書の中のコレラに関する記載が注目され，紹介されている[1]が，本書ではそれらの文書が数多く掲載されている．医師が記した文書1件，宮司が記した日記が2件，名主または名主役が記した日記が2件，不明が1件で，いずれも安政5年と6年のコレラの症状の観察や流行が広がっていくさま，他地域からの風聞，あるいは行政側からのお触れなどが記録され，さらに著者によって平易な言葉に置き換え解説されることによって，当時の人びとの生々しいまでのコレラへの対応が伝わってくる．

第1章では，コレラを初めて経験した医師がその症状を克明に記録し，病気の原因を見つけるために中国の医書からドイツの医書まで丹念に調べ，自身がその原因を考察し，治療方法にまで言及している．当時の医師が次々に人々の死んでいく未知の病に対し，どのように考え，治療していこうとしたのかを理解することができる．第2章で驚かされるのはその具体的な内容である．江戸での死者の数もさることながら．お触れがそのまま記録され，芳香散や五苓散など具体的な治療薬の製造方法まで記されている．少なくとも「安政記聞」の記録者には，コレラの薬が提示されたということであり，効果は別として庶民の治療の選択肢が広がっていることを示唆している．第3章の2件の宮司の日記には，コレラが流行し，当時の人々が神仏に対してどのように信仰という治療を行っていったかが克明に記録されている．第4章では，名主役の日記に日に日に近づいてくるコレラの様子が生々しく記録されているが，そこに記されている死亡者の名前がよりコレラの恐ろしさを鮮明に浮き出たせている．本書を通して，医師から見たコレラの症状と医療，名主など庶民が記録した当時の人々のコレラへの対処，治療としての神仏への信仰など当時の社会に暮らす人々の様々な視点からコレラが語られ，筆者の本書執筆の意図が十分に伝わってくる．

そのうえで，評者が読後に感じた課題を述べると，一つはそれぞれの文書の記録者の情報があまりにも少ないことである．「暴瀉病ニ付」を著した上原元伯について，医家の二代目で，若くして江戸に上り伯明先生に医学・医術を学んだとされるとあるが，元伯はコレラに対する漢方医学からのアプローチや「西洋の各種治療法」などについて言及しており，それを読む限りでは，漢蘭両方に精通しており，相当の知見を持った医師であることが分かる．ではその元伯は漢方医なのか，蘭学を学んだのか，師とされる伯明とは誰なのか，何歳のときコレラに遭遇したのかなどが全く触れられておらず，基礎的なデータが足りていない．元伯の履歴が不明なのかもしれないが，同様のことは「安政記聞」の記録者赤堀伴七にも言える．伴七については生没年のみで，村の中でどのような立場であったのか，情報をどれだけ知ることができる立場であったのかが不明である．赤堀家が名主なのか百姓なのか商人なのかによっても，コレラの情報が村内でどこまで浸透したのかが推測できるであろう．基礎的なデータの未記述という点については他にも，「触れ」を多く記録している「安政記聞」の赤堀家の居住地が天領なのか大名領なのかによって公儀からの触れの伝達方法やスピードは変わってくると思われるが，それについての言及も見られない．このように史料を読み解くうえでの基礎的データの提示が全体的にもう少し必要ではないかと感じる．

もう一つは掲載されている史料が断片的かつ取り上げ方が雑な面は否めない．「安政記聞」を例にとると，非常に多くの貴重な情報が記された内容であるが，掲載されている文書が「安政記聞」の

どこからの引用なのか，それは伴七の言葉なのか，触れや文書の写しなのか，あるいは他者の言葉なのか，必要な部分だけがピックアップされていて，筆者にとって必要な史料だけの羅列となっており，文書の全体像が見えてこない．さらには唐突に出てくる大間々町礪波秀斎とはだれなのか，あるいは「於出島千八百五十八年七月十三日」はポンペが長崎奉行所に提出した上申書と書かれ写真も掲載しているが，これは小見出しの「暴瀉病流行并治法」なのか，「安政記聞」内にそのまま掲載されてる史料なのか，それとも他からの引用なのかといった記述もない．専門書ではなくわかりやすい内容でという意図も汲み取れるが，だからこそ余計に基礎的なデータの挿入や史料そのものの解説・検討は大事であろう．

猛威を振るうコレラに対し当時の人々が具体的に記した記録には，人々の生きていこうという力強さや後世の人々に伝えていこうという切実さが読み取れる．その記録を見つけ出し，コロナ禍の私たちの前に再登場させた筆者には崇敬の念を禁じ得ない．そのうえで評者と意見の相違がみられる以下の箇所，現代の医師の立場から本書の史料を通観して「当時の庶民は祈ることで疫病を追い払えると本当に思っていたとしか言いようがない」と述べる筆者に，評者の代弁として次の引用を最後に添えておきたい，「コレラに悩まされていた幕末の民衆にとって，神仏への祈りは人命を守るための現実的な手段の一つであり，きわめて切実な営為であった」[2]．

1）宮間純一．地方文書からひもとく安政のコレラ．地方史研究協議会編．日本の歴史を原点から探る．東京：文学通信；p137–146など
2）1）と同じ；p145

（木下　　浩）

［みやま文庫，〒371-0017 群馬県前橋市日吉町1丁目9番地1号 群馬県立図書館4階，TEL. 027（232）4241，2021年10月，B6判，194頁，1,500円（みやま文庫会員価格：1,000円）］

## 洋学史学会 監修<br>青木歳幸，梅原　亮，沓澤宣賢，佐藤賢一，<br>イサベル・田中・ファンダーレン，松方冬子 編<br>『洋学史研究事典』

現在，洋学という学問領域を研究領域としている人は少ないと考えられる．しかし洋学史は，日本の現在の学術の源流として史学の中で決して小さいものではないと思う．

1984年に日蘭学会を編者として沼田次郎・石山洋・梅渓昇・大森實・片桐一男・酒井シヅ・矢部一郎の諸氏を編集委員として『洋学史事典』が雄松堂出版から刊行されて38年を経た．

2021年，洋学史学会の監修により，青木歳幸/梅原亮/沓澤宣賢/佐藤賢一/イサベル・田中・ファンダーレン/松方冬子を編者として『洋学史研究事典』が思文閣出版により刊行された．日本の現在における諸学の西洋からの導入をヒト・モノ・ナガレとして調べる必要になった時に，いままで頼ることの多かった『洋学史事典』に加えて，その後の史的研究の成果が事典の形で刊行されたことの意義は大変に大きい．

本事典は吉田忠による総論「洋学史研究試探」，「研究篇」I. 洋学の社会的基盤　II. 支えた人びと　III. 影響を与えたモノ　IV. 普及した書物　V. 研究教育の場　VI. 近世学芸から近代学芸へ，としての181項目，「地域篇」47都道府県すべてを網羅する196項目よりなる．執筆者は221名に上る．また付録として13頁にわたる「洋学関係資料所在目録」が巻末にある．吉田忠の総論にも編集委委員長の青木歳幸のあとがきでも述べられていることであるが，2001年から2004年に渡った文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「我が国